「教育臨床総合研究10　2011研究」

サタデースクールで学生が身につけた教師力の分析

A Analysis of the Teacher Capacities Bases that students acquired in Saturday-School

山　本　幸　市*　　福　間　敏　之*
Koichi YAMAMOTO　　Toshiyuki FUKUMA
池　山　圭　吾*　　長　澤　郁　夫*
Keigo IKEYAMA　　Ikuo NAGASAWA
境　　英　俊**
Hidetoshi SAKAI

要　旨

本学部の教員養成カリキュラムである1000時間体験学修においては，平成18年度から松江市教育委員会との連携事業で，松江市内のサタデースクール実施校へ学生が出かけ，児童生徒の学習支援を行ってきた。

本稿では，前出事業が実施後5年経過した今，その学習支援が教師力育成の上でどのような効果があったかを分析し，今後の連携のあり方について考察を行うこととする。

［キーワード］　学習支援，学習者理解，児童生徒の学習意欲

1．松江市サタデースクール実施の趣旨と経過

（1）趣旨について

この事業は，平成18年度から始まった。その趣旨は次の通りである。

> 児童生徒の学力，個性の伸長を図るためには個に応じた教育が必要である。そのためには，児童生徒の興味関心をさらに高めるための発展的学習やつまずきを解決するための補充的学習の機会等が求められる。
>
> また，松江市の学力調査，生活実態調査の結果から土曜日，日曜日の学習時間が全国に比べて十分でない状況も見受けられた。
>
> そこで松江市教育委員会は児童生徒の学ぶ機会を増やし，自ら学ぶ意欲の向上を図るため，この事業において土曜日を活用した実践的な調査研究を行う。

*島根大学教育学部附属教育支援センター専任教員（基礎体験領域担当）
**島根大学教育学部附属教育支援センター長（健康・スポーツ教育講座）

（２）事業の実施形態

本事業の実施形態は次の通りである。

①　内容

・実施を希望する学校が児童生徒の実態，保護者・地域の実態を踏まえて重点教科や実施方法を決定する。

②　対象

・原則として市内小学生（５，６年）と中学生（１，２，３年）の希望者。

③　実施日及び実施時間

・年間12回（月２回程度）2時間程度（例，９：00～11：00）

④　実施場所

・当該校教室　※小中合同実施を推奨

⑤　指導者

・塾長（退職教員）　‥各校１名＜学習指導の総括・学生の管理，学校との連携等＞

・島大教育学部学生　‥各校３～８名＜児童生徒の学習支援・指導等＞　教育学部連携。

・社会人支援スタッフ‥＜塾長・学生の補佐，児童生徒の学習支援・指導等＞

＊各校参加児童生徒数に応じて松江市教育委員会が委嘱

・当該学校の教職員　‥各校必要数＜学校施設管理，児童生徒の管理，学習指導等＞

・ＡＬＴ　‥必要数＜英語活動や英会話等要望のあった学校に派遣＞

・市職員ボランティア‥各校参加児童生徒数に応じて派遣を検討する。

（３）実施校と参加学生の推移

表１　サタデースクール実施校の変遷

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
小学校	川津小	川津小			
	島根小	島根小			
	竹矢小	竹矢小	竹矢小	竹矢小	竹矢小
	中央小				
	法吉小	法吉小	法吉小	法吉小	
	美保関小	美保関小	美保関小		
	八束小				
		内中原小	内中原小	内中原小	内中原小
		朝酌小	朝酌小	朝酌小	
		母衣小	母衣小		
		本庄小	本庄小	本庄小	
				津田小	津田小
				生馬小	生馬小
					八雲小
小計	7	9	7	7	5
中学校	八束中				八束中
	二中	二中	二中	二中	二中
	島根中	島根中	島根中	島根中	
	八雲中	八雲中	八雲中	八雲中	八雲中
	美保関中	美保関中	美保関中	美保関中	美保関中
		四中	四中	四中	四中
			湖北中	湖北中	湖北中
				湖南中	湖南中
小計	5	5	6	7	7
合計	12	14	13	14	12

表１はこれまでの5年間でサタデースクールが実施された学校の一覧である。諸事情で必ずしも同一校が継続しているわけではないが，竹矢小学校と第二中学校は，一貫して学生を受け入れてくださった。

大学と比較的距離の近い学校が少なく，逆に遠方の学校が増加傾向にある。大学の事情からいえば，自家用車といった交通手段をもたない学生を派遣しにくい状況にある。

学生側からは，複数年継続して同一校で学習支援する意味は大きい。その学校で，ある程度学習支援に自信をもち，また児童生徒との関係も築くことができ，教職への興味・関心を高める上で有意義である。

次の表２は，参加学生の推移を示している。

表２　サタデースクール参加学生数の推移（人）

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
合計	103	95	105	88	80

実施初年度と翌年度は，各専攻の学生を割り当てて各学校へ配置したため総数が多くなっているが，20年度からは学生の希望制へ移行した。年々参加数は減少傾向にあるが，これは学生の複数校配置を止め，単独校専属制にしたことによるものである。このことにより，学生は自分の配当された学校で，安心感をもって学習支援に取り組むことができた。

２．サタデースクールにおける学生の役割

実施各校における学生の役割は様々であったが，基本原則は，児童生徒の自主学習を側面的に支援することである。

小学校では，次のいずれかの形態であった。

① 学校側が用意した学習プリントを児童が解答し，その添削や個別指導を行う。

② 児童が，自分のやりたいと思う学習材（通信教育の問題集，学校の宿題，まとめ学習，予習復習，漢字や計算の練習ドリル等）の自立的な学習を支援する。

③ 上記以外で，各校独自のプログラム（英語活動や川柳づくりなど）を補助的に支援する。

中学校では，次のような形態であった。

① 学校側が用意した学習プリント（習熟度別）を生徒が解答し，その添削や個別指導を行う。

② 生徒が，自分のやりたいと思う学習材（学校で配布された補助問題集，学力テストの復習，通信教育の問題集等）の自立的な学習を支援する。

③ 学生が学校側と相談をしながら作成した数・英のプリントを生徒が解答し，その添削や個別指導を行う。

３．サタデースクールから得られた学生の学びについて

サタデースクールにおいては，1000時間体験学修の基礎体験領域における評価軸，すなわち教師力の10軸のうち特に，①学校理解，②学習者理解，④学習支援の指導技術，⑦コミュニケーションの４つに注目した。学校という施設で行われること，学習者としての子どもと直接関わる活動であること，その際の指導技術，そして子どもや学校関係者とのコミュニケーションである。

これらの項目について，学生自身の自己評価をもとに，学生の得た学びを明らかにしたい。

各項目の評価基準は次の通りである。

＜学校理解＞

・それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。（グラフ中①）

・教師の仕事を理解することができたか。（同上②）

＜学習者理解＞

・子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができたか。（同上③）

・幼児・児童・生徒への支援，指導，相談への対応などが適切にできたか。（同上④）

＜学習支援の指導技術＞

・学習支援のための指導技術はあったか。（同上⑤）

＜コミュニケーション＞

・学校や地域の方々と積極的に関わりを持とうとすることができたか。（同上⑥）

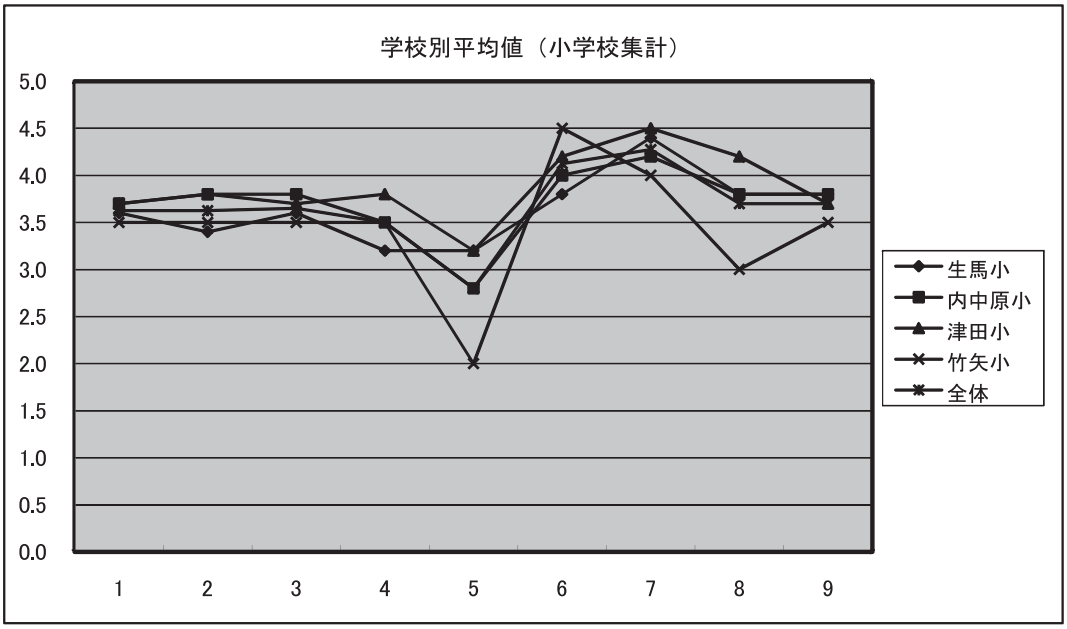
・場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。（同上⑦）

・実際の活動場面で子どもの話を聞き，それにきちんと答えることができたか。（同上⑧）

・体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。（同上⑨）

（1）小学校の場合

グラフ１　学校別平均値（小学校集計）



小学校で特徴的なのは，コミュニケーションの項目が著しく平均値を上回っている点である。これは学習支援の内容にもよるが，学生が小学生に積極的に関わり，コミュニケーションをとろうと努力した結果である。特に⑦「場や相手に応じた挨拶や言葉遣い」については，かなり意識して取り組んでいた。

逆に，他の項目に比べて平均値を下回ったのは，⑤「学習支援のための指導技術」である。小学校への参加学生は，１・２年生が多く，学習に集中できない子や理解に時間のかかる子への指導が思うようにできなかったことによると考えられる。

また，学校理解の項目については，平均値を上回ってはいるが，実施されるのが土曜日であるため，普段の学校の様子とは違って，「参加したい児童だけが参加している」という点で，学生に若干の迷いがあったのではないかと考える。

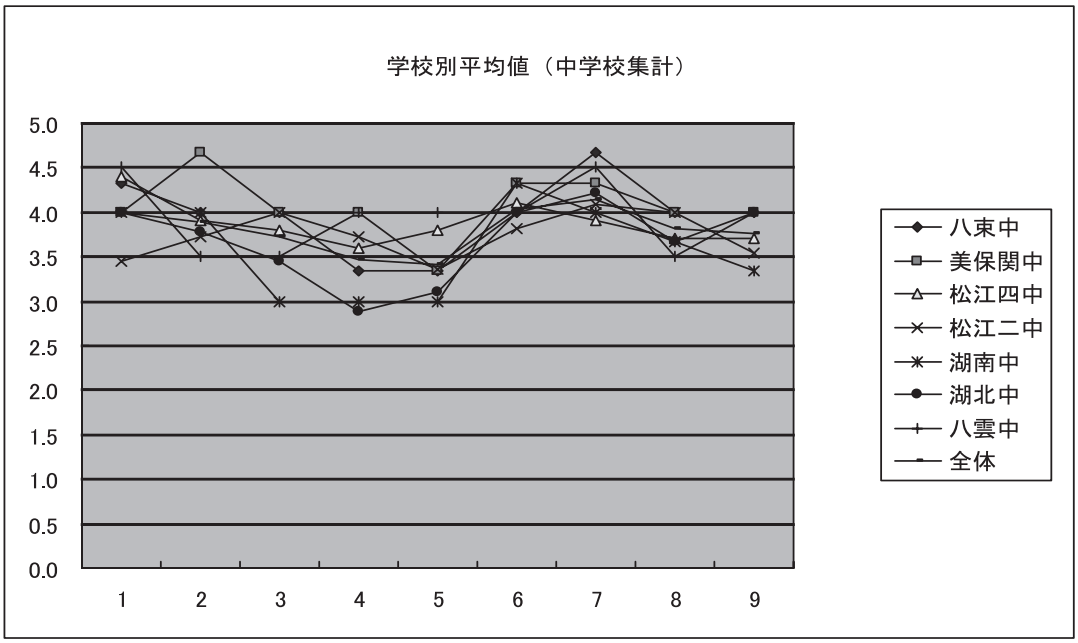
こうした自己評価から明らかなように，小学校では，各回ごとに，子どもたちがどんな学習をするかを事前に知ることが大切になる。例えば算数のプリント学習であれば，どんな単元の

どんな問題に取り組むのかについて事前に知り，つまずきそうな箇所について，どんな説明をすれば理解が進みやすいか「予習」して臨む必要がある。このことによって，自分の学習支援に少しでも自信をもち，子どもたちの学ぶ意欲の支えになることができるであろう。

自分のやりたい学習に取り組む学校についても，個々の学習スケジュールをある程度把握することによって，見通しをもった支援が可能であると考える。

（2）中学校の場合

グラフ2　学校別平均値（中学校集計）



中学校でも，小学校と同様に，⑤「学習支援のための指導技術」は，必ずしも自己評価が高くない。この理由は，前出の小学校の場合の他に，数英などの内容がより専門的になるため，専攻外の学生にとって学習内容を十分に把握できなかったことが理由として挙げられる。中には，学生の要望により，事前にプリントを配布し，予習をして学生に臨ませる学校もあった。また，生徒自身のつまずきを確認をしながら一緒に問題を解くなどの工夫をしている学生もいた。

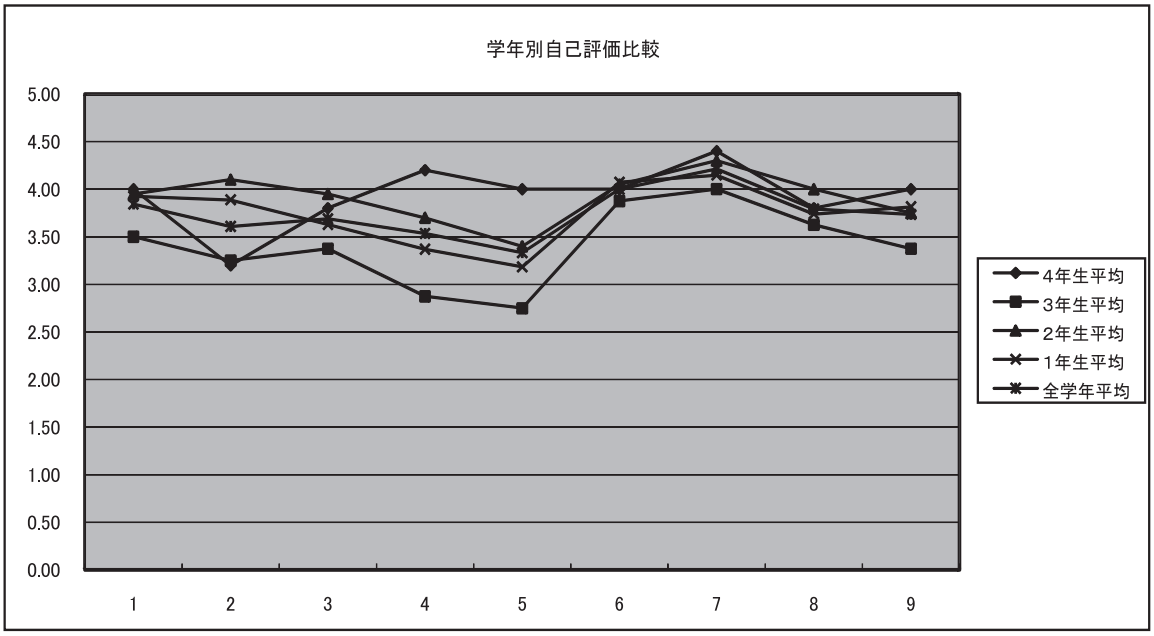
小学校同様に高い数値を示しているのが項目⑥と⑦である。「場や相手に応じた挨拶や言葉遣い」については，かなり意識して取り組んでいた。また，何かきっかけをつくって中学生と関わりをもとうと努力していた。こうした学生の姿勢は，自分が実際に教職に就いたとき，子どもたちとどういう関係をつくっていけばよいかを考える上で，大きなウエイトを占めているといってよい。何もせずただ見守るのではなく，自分から相手に働きかけようとするアクションこそが，より深い子ども理解につながっていくといえる。

小学校に比べ，実施各校によってばらつきが大きい項目が，①～④である。この理由の1つは，実施校の実施体制の違いが挙げられる。参加学生のクラスや教科を固定化している学校は，学生も教科の特徴や支援の仕方をより深く学ぶことができている。また，もう一つの理由とし

て後述するが，参加学年によって，評価に違いがある。１年生にとって，教えるということは，初めての体験であり，学習者理解の項目は低くなっている。したがって，実施校についても１年生が多い学校は，③，④が低くなる傾向がある。

（３）学年別の特徴について

グラフ３　　学年別自己評価の比較



グラフ３は，学生の自己評価を学年別で比較したものである。

一般的に，学年が上がるほど学びの質が高まり，自己評価は高くなると予想される。１年生から２年生へは順調に自己評価が上昇しており，4年生では④「児童・生徒への支援，指導，相談への対応などが適切にできた」及び⑤「学習支援のための指導技術はあった」について高い数値が出ている。体験時間とその質が向上するほど，学習者理解が進み，学習支援の指導技術も向上していくことを示している。

サタデースクールにおけるコミュニケーションについては，⑥「学校や地域の方々と積極的に関わりを持とうとすることができた」はほぼどの学年でも満足のいく数値となっている。

⑦の「場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができた」については，抽出項目中最も高い数値である。実施各校で重点的に指導していただいた効果が出ている。大学側でも事前・事中指導を通して学生に求めてきた基本中の基本である。

⑧の「実際の活動場面で子どもの話を聞き，それにきちんと答えることができたか」については，若干不安気味の学生が多かったといえる。各校とも，児童・生徒が学生に対して積極的に質問するという姿はさほど見られなかったことにもよるが，つまずきの発見とそれに対する対応，自信をもって指導できるスキルを磨くなどの課題が浮き彫りになっている。

３年生の数値がどの学年よりも低い位置にあるのは，一見理解に苦しむ状況である。これについては，次のような理由によるものであったととらえている。

① 教育実習Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの時期や実習セメスターとのスケジュール調整が難しかったこと。
② ３年生が参加した各校では，他校に比べて学習支援のハードルがやや高目に設定されていたこと。
③ 二校を掛け持ちする学生がいて，精神的に余裕が無く，自信をもって取り組めなかったこと。
④ 他学年に比べて，自己評価を厳しくする学生が多かったこと。

こうした分析からも明らかなように，年間10回あまりのサタデースクールでは，同一校に継続して通い，回を重ねるごとに学習者理解を深め，学習支援の質を高め，事業スタッフの方々とのコミュニケーションを高めていくことが基本であるといえる。

４．まとめと考察

（１） サタデースクールの取り組みで得られた成果

ここでは，学生が記述したことを基に，その成果をまとめてみたい。

① １年男子学生（小学校）

> 学校の先生方，塾長の先生から，私たち学生に本当に多くの指摘，アドバイス，激励のお言葉を頂き，毎回子どもとの関わり方についてしっかり考えることができた。私たち学生側の態度次第で学ぶことの多少が決まると思う。「自律力」が問われる活動だ。
>
> ほんの少しだが，児童との間に“かべ”を感じることができた。これは教師と児童の間にあるもので，よい意味での緊張感を味わうことができてよかった。

② ２年女子学生（小学校）

> 子どもたちとかかわる時間が長くなるほど，子どもたちがどこでどうつまずいているかを予想できるようになり，その時々に合った指導ができるようになった。1クラス任せてもらうことができたので，一年間を通して子どもたちとかかわることにより，どの程度の距離感で接するとよいか大変勉強になった。

③ ３年女子学生（小学校）

> 朝の会でする「講話」は，話のネタ探しが大変だったが，少しは自信をもって話すことができるようになった。毎回活動後には，自分自身の反省と活動の様子を見ていただいた先生方によるアドバイスはとても意味のあるものだった。先生方の意見は納得のいくことばかりで，自分の課題を明確にすることにつながった。
>
> 子どもたちに学ぶ楽しさを味わってもらうにはどんな学習が良いか，どんな話をすれば興味をもって聞いてくれるかというように，常日頃からネタ探しをしなければならない。「情熱」を失わないようにしたい。

④　3年男子学生（中学校）

問題プリントの作成を任されてのサタデースクールは初めてだったので，戸惑うことも多かった。生徒が分からないところを把握した状態で問題を作る事は難しいかった。予想もしなかったところでつまずいたり，逆につまずくだろうと思った問題を簡単に解いてしまったりと，生徒にあった教材を用意することの大変さを痛感した。

⑤　2年女子学生（中学校）

サタデースクールという短い時間の中で生徒と関わる時間が持てて貴重な経験ができました。最初の頃は，生徒も学生もどのような関わり方が良いのだろうと少しぎこちなさもありましたが，回を重ねるごとに教室の雰囲気や関係性も変化していき，私たちにとっても生徒にとっても良い学びの時間にすることができたのではないかと思います。

学習支援の場では，答えを教えるのではなく，生徒自身に考えさせる支援の難しさを感じました。答えを知ることではなく，学ぶ・考える姿勢を身につけさせることことが大切な目的の一つであると感じ，そのために，私自身が，どこまで，どのようにサポートするかを考えさせられました。

①では，「自律力」という言葉が象徴的なように，自ら求めることの大切さを学び，子どもとの間に，ある一定の距離感をもつことが必要であることに気づいている。

②では，同じ学校に2年間お世話になったことにより，子どもたちとの適切な距離感をさらに明確に感じ，つまずきのポイントが見通せるようになった。予測的な学習支援が大切であり，そのことを自覚していることがうかがえる。

③では，教育現場をより身近に感じ，学級担任としてこれから自分は何を身につけていかなければならないかを強く自覚している。「情熱」あふれる先生方の姿勢から，自分もそれを持ち続け，子どもたちのために働きたいと，教職への強い意志を表明している。

④では，学習内容を理解するだけではなく，生徒の習熟の状況も考えながらプリント等の教材を準備することが，大切であることに気づいている。

⑤では，子どもたちは，答えを知ることよりも，自分自身で考えることが重要であることを認識し，そのために，学生として，また教師としてどのような支援をしていけばいいかを考えるきっかけになったことがうかがえる。

こうした学生の学びに対して，サタデースクールで学んだ児童生徒が，どの程度学習意欲を高め，常日頃の学校生活を充実させ，また家庭学習へどのような波及効果があったのか，いずれ日を改めて検証してみたい。

（2）学生の取り組みから明らかになった課題

＜小学校での課題＞

①　子どものつまずきに対応しきれず，学習支援が十分に行えなかった。

これは，運営上の課題である。サタデースクール当日に，子どもの取り組むプリントが学生に渡される。すらすら取り組める子もいれば，遅々としてはかどらない子もいる。そうした中にあって，どうしたらこの子がその内容を分かるようになるか，その場その場で判断して行かなくてはならない。この点が学生にはやや荷が重かったようである。

事前にプリントを入手するなどして，当日の内容について教材研究しておくことが欠かせない，こういう声が学生から多く聞かれた。実施校へお願いして，この点が実現するよう働きかけたい。

② 支援の「レベル」を見極めることの難しさ

対象とする子がどこまで分かっていてどこまでが分かっていないか，どこにつまずいているのか，何をヒントとして提示してやればよいか，こういったことに迷いや悩みが多かった。学力差が大きい中にあって，回数を重ねるたびに子ども理解は深まっていくが，特につまずきがちな子どもが「そうか，わかったぞ！」と喜べるような学習にまで高めることは容易ではなかった。学習支援の指導技術が向上するよう，大学側が何らかの取り組みを行う必要がある。

＜中学校での課題＞

中学校でも，小学校と同様な課題のほか，いくつかの課題が挙げられる。

① 子どものつまずきに対応しきれず，学習支援が十分に行えなかった。

学生が，中学校段階での各学年の学習内容を十分に把握しておらず，数学の問題に対して，高校生レベルの解法で説明をしたこともあった。また，英語の指導についても同様のことがあった。学生にとって，自分がわかっても人にそれをわかるように説明することの難しさを知ったり，教材研究の必要性に気付かされたりした活動になったといえる。教材研究の必要性から，実施校へお願いをして，事前にプリントを入手するなどの必要性を感じている。

② 支援の「レベル」を見極めることの難しさ

個々の生徒が，どこでつまずいているのかを把握するための声かけをどの様にしたらいいかわからなく困った，という声が多かった。そのような中で，ある学校では，プリントを学生が作成をした。そのプリントは，つまずいた所を更に別の問題で復習できるようにしてあり，この課題を克服する１つの例となるといえる。また，複数クラスで事業を実施した学校は，個々の学生が支援をするクラスを統一したところも多く，学生にとっては，時間はかかったが，個々の「レベル」の把握を行うこともできた。

③ 教科の専門性

中学校では，より学習内容が高度になり，専門的な内容も多くなる。その様な中で，学習内容を把握して支援をする事が難しく，あいまいな支援しかできなかったり，その教科の専門の学生に支援を依頼したりと反省をしている学生が多くいた。

前述したように，実施校へお願いをしてプリントを事前に入手をし，学生が事前準備をするほかに，数学，英語などの専攻の学生への参加呼びかけも必要である。

④ 生徒とのコミュニケーションの不足

思春期を迎えている中学生に対して，どのように関わってよいかがわからず，悩んだ学生が多くいた。わからない部分を中学生自ら質問をする事も多くなく，どの様に声かけをすれば，

より良い支援ができるのかを教科指導以上に課題として取り上げている学生もいた。

このような中で，現職の先生や地域ボランティアの先生方の様子を見たり，関わり方を教えていただいたりして，徐々に力をつけてきている学生もいる。

（3）今後の連携のあり方について

〇学生に求めたい姿勢

児童生徒へ積極的に関わろうとする姿勢は，教職を志すものの基本中の基本である。このことを心に留め，どうしたら子どもの学習意欲を引き出すことができるか，指導スタッフの方々と積極的にコミュニケーションをもち，分からないことや疑問に思ったことは聞き，学習支援の工夫を惜しまないようにさせたい。特に，教師としての声かけに自信をもたせたい。

〇実施各校へ今後お願いしたいこと

アンケートから明らかなように，学生が自信をもって学習支援に当たるには，事前の「予習」＝教材研究が欠かせない。できるだけ前日までに，当日配布される資料等を入手して学生に手渡せるようにしたい。こうすることによって，特に中学校では，学生が自分の教科専攻の専門性を高めることにつながる。そして，自分の専攻教科の内容だけでなく，他教科指導にも自信がもてるようになり，実際に現場で担任となった時に，生徒への対応力に幅が出ると考える。

5．おわりに

本事業は，松江市教育委員会学校教育課の温かいご理解とご指導，そして実施各校の塾長さんをはじめとする指導スタッフ，地域サポートスタッフの方々のおかげで成り立っている。記して感謝申し上げたい。

今後もより一層連携を密にしながら，サタデースクールに通う児童生徒が学習意欲を向上させてくれることを願っている。そして，その子どもたちから多くを学び，学生が教師として，また社会人として地域に貢献できるよう，今後とも適切に指導していきたいと考えている。